

## ヒッタイト語楔形文字粘土板から導き出される新たな音韻特徴

## ——破擦音の長短の対立——

吉田和彦

京都産業大学

【要旨】 古代アナトリアにおいて楔形文字粘土板に記録されたヒッタイト語の音韻特徴として、子音の長さの対立は閉鎖音、摩擦音、共鳴音、喉音においてみられるが、破擦音については対立がないと従来考えられてきた。しかしながら、文献学の立場から古期、中期、後期ヒッタイト語という厳密な時代区分を行ったうえで分析すると、古期ヒッタイト語において母音間のシングルの *-z-* がアナトリア祖語の \**d* に遡る例があることが分かった。他方、シングルの *-z-* が \**t* を反映している例はない。この知見は、アナトリア祖語の \**ti* は \**tsi* になる一方、\**di* は \**dzi* になるという音変化を示している。そして無声の破擦音はダブルの *-zz-* で書かれ、有声の破擦音は *-z-* で書かれる。子音の有声無声という特徴が閉鎖時間の長さと同様相関することはよく知られている。したがって、古期ヒッタイト語では破擦音にみられる子音の長さの対立がなお存続していたことが分かる<sup>†</sup>。

キーワード：文献学、比較言語学、ヒッタイト語楔形文字粘土板、アナトリア諸語、破擦音

## 1. はじめに

言語学研究はもとより文字研究においても業績をあげられた西田龍雄氏は、河野六郎氏との対談のなかで「文字という記号は、いわば言葉に着せる衣装<sup>コスチューム</sup>である」と述べておられる（河野・西田 1995: 222）。そしてダブダブの衣装をまとった言語がある一方、ピチピチの衣装を好む言語もあると書いておられる。後者の典型的な例として考えられるのは、中国四川省の涼山彝族によって古い彝文字から改変された規範彝文である。そこでは声調の対立がそれぞれ特有の字形に表されていて、総計 819 の音節文字を持っている（西田編 1986: 248–249 を参照）。しかし、このようなケースは膨大な数の音節文字をつくり出すことになるために、きわめて例外的といってよいだろう。一般的には、言語の組織にみられる音韻的対立がすべて文字のうえに書き表されることはない。

紀元前 16 世紀から 13 世紀にかけてアナトリア地方で記録されたヒッタイト語は、印欧系の言語でありながら、他の系統の言語であるシュメール語やアッカド語など

<sup>†</sup> 本論文の最終稿を作成するにあたって、お二人の査読者からいただいたご意見はたいへん有益であった。あつくお礼申し上げる。なお本研究は日本学術振興会科研費 22K00541 「文献学の成果に裏づけられたヒッタイト語の歴史言語学的研究」の助成を受けている。

と同じく、楔形文字で粘土板のうえに記録されている<sup>1</sup>。ヒッタイト語粘土板では、表音である音節文字や表意文字のみならず、後続の語の意味情報を指示する限定符、アッカド語、ルウィ語、パラ語といった外国語もすべて楔形文字で表記されている。また同一の楔形文字が表音的にも表意的にも用いられることがある。この点で機能的違いのある衣装を必要に応じて選ぶ日本語とは根本的に異なっている。

文字が特定の言語を書き表すために用いられていることは言うまでもない。文字は言語を伝達するための手段であるので、文字だけを切り離して考えることはできない。したがって、その背後にある言語の組織との関係が常に問題となる。ちなみに上記の対談のなかで、河野六郎氏と西田龍雄氏はともに、文字研究でいちばん重要であるのは文字と言語との関係であると述べておられる（河野・西田 1995: 13）。ヒッタイト語においてこの関係を明示的に示すのは容易ではない。ひとつの重大な問題は、ヒッタイト語楔形文字が表音文字として使われた場合、各文字がV, CV, VC, CVCのいずれかの音節構造しか持たないことにある。このシステムでは、印欧語に普通にみられる語頭や語末の2つ以上の子音連続、および語中の3つ以上の子音連続を書き表すことができない。これらの子音連続を表記するには、どうしても実際には発音されていなかったダミーの母音を差しはさんで書かねばならなかった。この限界は、音韻的な解釈を行うときに大きな障害となる。なぜならば、起源的には母音の子音連続のなかに存在していなかったとしても、後に母音が挿入された結果として書かれるようになったことも十分に考えられるからである。つまり母音がかかれていたのが表記上の限界によるのか、あるいは実際にその母音が読まれていたのかを決定することは、多くの場合困難である<sup>2</sup>。

以上述べたように、正確な音韻特徴を直接得ることが難しいという点において、ヒッタイト語はすぐれてダブダブの衣装をまとった言語であるといえるだろう。それにもかかわらず、文献学的・言語学的方法を用いることによって、より詳細な音韻特徴を引き出すことは決して不可能ではない。本稿はそのひとつの試みである。

## 2. アナトリア諸語研究の近年の発展

ヒッタイト語は1915年にチェコのオリエント学者、フロズニーによって解読されたが、この言語の研究は近年めざましい発展を遂げつつある。この発展をもたらす主たる原動力となっているのは、ヒッタイト語が記録されている粘土板に関する文献学的な立場からの成果である。以前は粘土板が書かれた時期、およびその粘土板がオリジナルかコピーかの判断は、ほとんどなされていなかった。ところが、

<sup>1</sup> 音声による直接伝達だけで社会生活を営むことが困難になり、空間的にも時間的にも離れた人間同士の間接伝達的手段として発明された文字は、必要な場合に変更を蒙りながら異なった言語に対しても言語の系統を越えて広がっていくことが多い。文字の伝播のプロセスを跡づけることは言語の分岐の場合ほど難しくはない。

<sup>2</sup> たとえば、pa-ra-a「前に」と綴られる語は印欧祖語の\*proに遡る。この語が初頭の子音連続を保持する/prā/と読まれていたのか、あるいは挿入母音が二次的に差しはさまれた/parā/と読まれていたのかは、にわかには決定しがたい。

1970年代以降、字形の変遷などの文献学的根拠や考古学的な根拠に基づいて、テキストを古期、中期、後期ヒッタイト語のそれぞれに時代区分すること、さらにはテキストがオリジナルの粘土板に記録されているのか、あるいは後の時代のコピーかという認定がかなりの程度可能になった<sup>3</sup>。粘土板の時代区分が可能になったことによって、2つの大きな目標を達成するうえでの基盤が与えられるようになった。そのひとつは、音韻論、形態論、統語論のいずれのレベルであれ、それぞれの時代の共時的な分析結果を歴史的な観点から跡付けることによって、ヒッタイト語内部の言語史を解明することである。ヒッタイト語の歴史文法は、近年の文献学的成果に基づいて、今後書き改めなければならない。ギリシア語史やラテン語史に匹敵するヒッタイト語史の構築が待ち望まれる。もうひとつの目標は、インド・ヨーロッパ諸語のなかで最も古い時期に書かれた古期ヒッタイト語の文法特徴を明らかにすることによって、古期ヒッタイト語の視点から、従来再建されていた印欧祖語を見直すことである。かつて、ヒッタイト語が発見される以前の印欧語比較研究の歴史において、祖語の再建に向けてサンスクリット語が中心的な役割を果たした時代があった。その理由は、他の諸言語が失った多くの特徴をサンスクリット語がなお保存していたからである。ヒッタイト語が印欧祖語に遡ると考えられる重要な特徴を保存していることは20世紀前半からよく知られていた。有名な事例としてあげられるのは、ソシュールが理論的に再建した喉音 (laryngeals) をヒッタイト語が保持していることである。21世紀の印欧語比較研究においても、サンスクリット語がかつて果たしたのと同じような役割をヒッタイト語が担うことは大いに期待できるだろう。

ヒッタイト語研究の早い段階から、古代アナトリアで使用されていた印欧語はヒッタイト語だけではなくたということは広く知られていた。しかしながら、先行研究のなかでアナトリア語派という名前がしばしば使われているにもかかわらず、実際にアナトリア祖語の文法特徴を再建しようとする試みはほとんどなされなかった。古期ヒッタイト語の文法特徴から、明らかにヒッタイト語独自の革新と受け取れるものを取り除いて、あとに残ったものをアナトリア祖語の文法特徴とする傾向さえあった<sup>4</sup>。このような見方を取らざるを得なかった理由は明らかである。ヒッタイト語以外のアナトリアの諸言語 (楔形文字ルウィ語、象形文字ルウィ語、リュキア語、パラ語、リディア語など) は、その言語資料が断片的であったために、実質的に比較研究に寄与するところがほとんどないと考えられていたからである。ところが、この状況は近年大きく変わった。これらの言語で書かれた新資料が数多く発掘、報告された結果、解説作業が飛躍的に進み、編纂されたテキスト、語

<sup>3</sup> ヒッタイト粘土板資料がどのようにして時代区分されるかという具体的な手順については、Yoshida (2021) に示されている。

<sup>4</sup> 一例をあげると、従来はヒッタイト語の4母音体系がアナトリア祖語にそのまま再建されていた。しかしながら Melchert (1987) によるアナトリア比較研究は、印欧祖語の5母音体系がアナトリア祖語に継承されていることを明らかにしている。

彙集などがつぎつぎと発表されるようになったからである。かつては名のみであったアナトリア比較研究は本格的な時代に入ったと考えられ、それぞれのアナトリアの言語が有機的なかたちで貢献する時期に到達したといつてよいだろう。

### 3. ヒッタイト語にみられる子音の長短

古代アナトリアの楔形文字言語の書記は、有声閉鎖音と無声閉鎖音を含む文字を用いて有声閉鎖音と無声閉鎖音を区別することはしなかった。たとえば、*i-ú-ga-an* ~ *i-ú-kán* ‘yoke’, *e-eš-du* ~ *e-eš-tu* ‘let him be’ にみられる *g~k*, *d~t* の交替のように、両者はかなり自由に入れ替わることができる。書記が区別しようとしたのは、有声と無声の違いではなく、閉鎖時間の長さの違いだったと推定できる<sup>5</sup>。つまり、母音間で短い子音はシングルで綴られ、長い子音はダブルで綴られた。歴史的な観点に立つと、シングルの閉鎖音はアナトリア祖語の有声閉鎖音、ダブルの閉鎖音はアナトリア祖語の無声閉鎖音に対応する。たとえば、*ú-i-ta-a-ar* ‘water (plural)’ (< \**úéd-ör*) のシングルの *-t-* は印欧祖語の \**d* に遡る一方、*lu-uk-ke-ez-zi* ‘he lights’ (< \**louk-éje-ti*) のダブルの *-kk-* は印欧祖語の \**k* を継承している。つまり他のインド・ヨーロッパ諸言語にみられる有声と無声の対立が子音の長さの対立に置き換わったと考えられる<sup>6</sup>。

シングルとダブルの綴りの対立は閉鎖音だけでなく、摩擦音、共鳴音、喉音 (laryngeals) にもみられる<sup>7</sup>。ここで当然問題となるのは、同じ対立が破擦音 *-z-* と *-zz-* のあいだにあるかどうかである<sup>8</sup>。Melchert (1994: 23) は、閉鎖音、摩擦音、共鳴音、喉音の場合と異なり、母音間の破擦音には長さの対立がない、と述べている。

<sup>5</sup> いわゆる音韻論における *tense* と *lax* の対立であり、長い (強い) 子音は無声、短い (弱い) 子音は有声という特徴と相関関係にあることはよく知られている。

<sup>6</sup> このような置換がなぜ起こったかは不明であるが、ひとつの可能性を示したい。アナトリア祖語の時期に、語頭と語末位置で有声と無声の対立は失われた。たとえば、重複音節を語頭に持つヒッタイト語動詞 *tittanu-* ‘appoint’ (語根は \**dhehi-*) では、本来は有声閉鎖音 \**dh* であった動詞語根初頭子音が重複音節の後でダブルの *tt* で綴られている。これとまったく並行する現象は、有声と無声の区別のあるアルファベットで書かれているリュキア語にもみられる (リュキア語 *ta-* ‘put’ < \**dhehi-*)。これに対して、語末では有声子音が一般化された。その根拠は、たとえば定動詞形 *pait* ‘(he) went’ に後倚辞 *-aš* ‘he’ が後続するとき、*pait-aš* というように定動詞の語末子音がシングルの *t* で綴られていることにある。すなわち、本来の有声と無声の対立は、母音間においてのみ子音の長さの対立という二次的に置き換わったかたちで間接的に反映されている。子音に長短の対立があるという特徴は、地域的に隣接する楔形文字言語である系統不明のフルリ語にも観察される (cf. Wilhelm 2004: 98)。したがって、アナトリア内陸地域に共通するこの非インド・ヨーロッパ的な言語特徴は、言語接触によってもたらされたと考えられることは不可能ではない。

<sup>7</sup> たとえば、Melchert (1994: 21ff) をみられたい。

<sup>8</sup> ヒッタイト語楔形文字には、*z* で転写される文字が含まれている。この *z* の音価は歯茎位置で調音される破擦音 [ts] であると考えられる。その理由は *t* で終わる語幹、たとえば *humant-* ‘all’ からつくられる単数対格は *hu-u-ma-an-ta-an* あるいは *hu-u-ma-an-da-an* と綴られるが、*-š* [s] (< \**-s*) という語尾を持つ単数主格は語幹末の \**t* と語尾の \**s* という子音連続が *hu-u-ma-an-za* として綴られていることによる。

しかしながら、少なくとも古期ヒッタイト語には破擦音の長さの対立があったことを示す根拠がある。その主たる根拠は、3人称単数現在形動詞語尾 *-zzi* と *-zi* から得られる。

#### 4. *-Vzzi* と *-Vzi* の分布

印欧祖語の3人称単数現在能動態語尾 *\*-ti* は、ヒッタイト語の先史において *\*t* の直前で *\*t* が破擦化を蒙った。その結果、この語尾はヒッタイト語で *-zzi* あるいは *-zi* と書かれる<sup>9</sup>。この破擦化は他のアナトリア諸語にはみられないために、ヒッタイト語内の先史に生じた音変化であることが分かる。前節で述べたように、子音の長短の違いは母音間においてのみ明示的にみられるために、以下の分析では母音語幹動詞のみを考察の対象にする。

古期ヒッタイト語テキストの包括的な調査によると、祖語の *\*-ti* はダブルの *z* を持つ *-Vz-zi* で現れることが予想されるが、実際にはシングルの *z* を持つ *-V-zi* という語尾もみられる。以下の表に示したのは、古期ヒッタイト語テキストに現れる *-Vz-zi* と *-V-zi* を含む動詞の頻度数である。それらは、記録された時期ごとに語幹別 (a- 語幹, u- 語幹, i/e- 語幹) に分類されている<sup>10</sup>。

	-az-zi	-a-zi	-uz-zi	-u-zi	-i/ez-zi	-i/e-zi
OS	6	0	14	3	263	7
OH/MS	5	15	7	10	150	1
OH/NS	8	32	5	16	146	0
OH/?	0	4	1	2	35	3

##### 4.1. *-az-zi/-a-zi* と *-uz-zi/-u-zi*

まず a- 語幹の *-az-zi/-a-zi* と u- 語幹の *-uz-zi/-u-zi* について考える。OS(古期ヒッタイト語のオリジナル) においてはダブルの *-zz-* を持つ語尾がシングルの *-z-* を持

<sup>9</sup> ただし古期ヒッタイト語には *-zi* ではなく、*-za [-ts]* という語尾を持つ例がある ([*e-c*]š-*za* 'is' KBo 6.2 iv 54, *ta-ru-ub-za* 'conquers' KUB 43.75 Rs. 9, *ba-ar-za* 'holds' KBo 9.73 Vs. 12)。この貴重な例によって、破擦化した *\*-tsi* (< *\*-ti*) は後に末尾の *-i* を失ったことが分かる。しかし1人称単数の *-mi* や2人称単数の *-ši* からの形態的影響によって、再び *-zi [-tsi]* となった。なお KBo 6.2 iv 54 といった書誌情報は、KBo (= Keilschrifttexte aus Boghazköi) と略される粘土板模写テキストの第6巻の2番目の写本のコラム4の54行目に該当形式が記録されていることを意味する。同じく後で言及する KUB, ABoT は、それぞれ Keilschrifturkunden aus Boghazköi, Ankara Arkeoloji Müzesinde Bulunan Boğazköy Tabletleri という粘土板模写テキストの略である。

<sup>10</sup> 表のなかで使われている略号は以下のとおりである。OS (Old Script) = 古期ヒッタイト語のオリジナルの粘土板, OH/MS = 古期ヒッタイト語のテキストの中期ヒッタイト語におけるコピー, OH/NS = 古期ヒッタイト語のテキストの後期ヒッタイト語におけるコピー, OH/? = コピーされた時期が決定できない古期ヒッタイト語のテキスト。なお IZ という文字は *iz* と *ez* の両方を表す。この曖昧性を表すために大文字で転写する。動詞の実例と記録されている粘土板の箇所については、Yoshida (2017) の 888–899 頁をみられたい。なお、*i/e-* 語幹については Yoshida (1998) にデータを追加したうえで、Yoshida (2021) の分析を詳細に再検討したものである。



つ語尾よりもはるかに多いことが分かる。つまり -az-zi が 6 例 (ja-az-zi 'does', pí-ja-na-az-zi 'rewards', [t]a-a-ja-az-zi 'steals', [ta-]ja-az-zi, šu-ua-ja-az-zi 'pushes', hu-ul-la-az-zi 'destroys') であるのに対して -a-zi は記録されていない。また -uz-zi が 14 例 (ar-nu-uz-zi 'makes go, (re)moves' 3 例, pá-r-ku-nu-uz-zi 'purifies' 6 例, pí-ti-nu-uz-zi 'causes to run', [ti-it-ta-nu]z-zi 'places', [ua]-aḥ-nu-u[z-zi] 'turns', za-nu-uz-zi 'cooks' 2 例) であるのに対して -u-zi は 3 例 (ar-nu-zi, iš-pár-nu-zi 'strews' 2 例) である。他方、後の時期のコピー (OH/MS, OH/NS, OH/?) ではシングルの -z- を持つ語尾が顕著に増加している。この事実は、ヒッタイト法律文書の古期ヒッタイト語オリジナルにみられる -uz-zi が、後の時期のコピーの該当箇所では -u-zi と書き改められていることから裏付けられる。

ar-nu-uz-zi KBo 6.2 i 2 (OS) → ar-nu-zi KBo 6.3 i 9 (OH/MS)

ar-nu-uz-zi KBo 6.2 i 38 (OS) → ar-nu-zi KBo 6.3 i 47 (OH/MS)

pár-ku-nu-uz-zi KBo 6.2 iii 33 (OS) = pá-r-ku-nu-uz-zi KUB 29.16 iii 7 (OS) → pá-r-ku-nu-zi KBo 6.3 iii 37 (OH/MS), pá-r-ku-nu-zi KUB 29.17, 4 OH(?)

pár-ku-nu-uz-zi KBo 6.2 iii 35 (OS) = pá-r-ku-nu-uz-zi KUB 29.16 iii 9 (OS) → pá-r-ku-nu-zi KBo 6.3 iii 40 (OH/MS)

pár-ku-nu-uz-zi KUB 29.16 iii 12 (OS) → pá-r-ku-nu-zi KBo 6.3 iii 43 (OH/MS)

うでで示したように、シングルの -z- を持つ形式が後の時期の革新であることは明白である。

後の時期の粘土板にみられるシングルの -z- は、いわゆる「簡略綴り (simplified spellings)」によって説明できる。

-az-zi      𐎠𐎡𐎣𐎤 → -zi      𐎡𐎣

-uz-zi      𐎠𐎡𐎣𐎤 → -zi      𐎡𐎣

-IZ-zi      𐎠𐎡𐎣

az 𐎠𐎡 と uz 𐎠𐎡𐎣 という文字はかなり画数が多いために、後代の書記はそれらを省略して動詞語尾を綴った。後の時期のヒッタイト語において簡略綴りが好まれるという観察は、後期ヒッタイトの歴史文書である青銅タブレットをみれば明らかになる (cf. Otten 1988)。この文書に記録されている -Vz-zi と -V-zi で終わる 3 人称単数現在動詞を語幹別に分類すると、つぎのとおりである。

a- 語幹 : i-ja-zi 'makes' 3 例, ua-ak-ši-ja-zi 'is lacking'

u- 語幹 : ti-it-ta-nu-zi 'places' 2 例, ua-aḥ-nu-zi 'turns' 3 例, te-ep-nu-zi 'belittles' 2 例

i/e- 語幹 : la-aḥ-ḥi-ja-IZ-zi 'makes a campaign' 2 例, ú-IZ-zi 'comes', pa-IZ-zi 'goes' 3 例, ma-la-(a)-IZ-zi approves' 2 例, ta-pár-ri-ja-IZ-zi 'determines' 2 例, ḥa-an-ti-ja-IZ-zi 'arranges'

a- 語幹および u- 語幹動詞は例外なくシングルの -z- を持っている。これに対して、

i/e- 語幹動詞はすべてダブルの -zz- で特徴づけられている。IZ 𐎠 という文字は3画からなる簡単な文字であるために、書記にはIZを省略する動機がなかったと考えられる。

しかしながら、うえに示した表のOSには263例にのぼるダブルの -i/ez-zi とは別にシングルの -i/e-zi の例が7つ含まれている。それらは ak-ku-uš-ki-zi ‘drinks (imperfective)’ KBo 17.11 iv 7, [h]u-la-a-li-e-z[i] ‘winds around’ KBo 25.100 Rs. 3, i-e-zi ‘does’ KBo 6.2 i 60, pí-ḥu-te-zi ‘brings’ KBo 20.10 i 4, pí-iš-ki-z[i] ‘gives (imperfective)’ KUB 43.30 iii 20, ú-e-mi-zi ‘finds’ KBo 6.2. iv 12, zi-in-ni-z[i] ‘finishes’ KBo 20.10 i 5 である。これらに加えて、シングルの -z- の例は OH/MS に1例 (du-ṣa-ar-ni-zi ‘breaks’ KBo 6.3 iii 70), OH/? に3例 (na-ak-ki-e-zi ‘is important’ KBo 13.13 Vs. 6, [n]a-ak-ku-uš-ši-e-zi ‘?’ KBo 12.13 Vs. 6, na-ak-ku-uš-ši-e-zi ‘?’ KBo 12.13 Vs. 13) 含まれている。さらに簡略綴りは後のヒッタイト語の特徴であるにもかかわらず、OSにはシングルの -z- を持つ -u-zi の例が3つ含まれている。それらはいずれも接辞 -nu- を持つ動詞である (ar-nu-zi ‘makes go, (re)moves’ KBo 6.2 iv 5, iš-pár-nu-zi ‘strews’ 2例 KBo 20.10 i 12, KBo 20.10 ii 9)。以上の -i/e-zi と -u-zi について、歴史比較言語学的観点からの分析をそれぞれ 4.2 節と 4.3 節で行う。

#### 4.2. -i/e-zi- を持つ動詞

4.1 節の終わりに示した -i/e-zi- を持つ古期ヒッタイトのオリジナルに記録されている7例のうち、その読みについて信頼できる解釈が与えることのできない例が3つある。[h]u-la-a-li-e-z[i] と pí-iš-ki-z[i] については、いずれも OS の断片に記録されている。Neu (1980: 176, 78) はそれらの最後の文字を z[i] と転写しているが、文字の大半が欠落しているためにこの読みは確実ではない。z[i] 𐎠𐎠𐎠 ではなく、i[z] 𐎠𐎠 である可能性がある。この場合にはダブルの -zz- を持つ i[z-zi] と書かれていたと想定できる。同様に ak-ku-uš-ki-zi もシングルの -z- を持っているが、この形式は行末に書かれており、IZ を書くための十分なスペースが粘土板上になかったために省略された可能性が十分に考えられる。

これに対して、残りの4つの例は文字の欠損もなく、行末にも書かれていないために、そこに含まれるシングルの -z- は言語学的理由によるとしか考えられない。まず、ú-e-mi-zi は接辞 \*je- にアクセントが落ちない \*au-ém-je-ti に遡る<sup>11</sup>。語根にアクセントが落ちることは、アクセントを持たない \*e がヒッタイト語で e と書かれないことから裏づけられる。したがって、語尾の \*-ti の \*t はアクセントのない母音間で弱体化して \*d になる<sup>12</sup>。つぎに、i-e-zi と pí-ḥu-te-zi はともに語根動詞であり、それぞれ \*Hiéhí-ti (cf. ギリシア語 ἦμι < \*Hi-Hiéhí-mi ‘I set in motion’, ラテ

<sup>11</sup> 動詞前接辞が \*au- と再建されることについては、ヒッタイト語の ú-e-IZ-zi ‘comes’ (OS) および楔形文字ルウイ語の a-ú-i-ti (< \*au-híei-ti) を比較されたい。語根はラテン語の emō ‘I take’ に比定される。

<sup>12</sup> Eichner (1973) と Morpurgo Davies (1982/3) によって提案された子音の第2弱化規則による。

ン語 *iēcī* ‘I threw’) と  $*(pé)-h_2(e)u-dhéh_1-ti$  (cf. ギリシア語  $\tau\acute{\iota}\theta\eta\mu$  ‘I place’) という祖形に遡る。アナトリア祖語の段階で  $*h_1$  が消失し、先行する  $*e$  が代償延長を受けた結果 ( $*éh_1 > *é$ )、両者とも語尾の前にアクセントのある長母音を持つようになった。さらに、アクセントのある長母音の後で生じた子音の第1弱化規則が働き、語尾  $*-ti$  は  $*-di$  になる<sup>13</sup>。*zi-in-ni-z[i]* については、鼻音接中辞を持つ  $*ti-né-h_1-ti$  あるいは  $*si-né-h_1-ti$  という祖形から導かれる (Oettinger 1979: 152, Kloekhorst 2008: 1037)。この場合も、語尾  $*-ti$  の前にアクセントの落ちる長母音 ( $*éh_1 > *é$ ) があるために、子音の第1弱化規則によって  $*d$  を含む  $*-di$  を建てる独自の根拠がある。

つぎに古期ヒッタイトのテキストの中期ヒッタイト語におけるコピー (OH/MS) に記録されている例について考えたい。*du-ua-ar-ni-zi* は、うえて考察した *zi-in-ni-z[i]* と同じく鼻音接中辞を持つ  $*dhur-né-h_1-ti$  に遡ると考えられる (cf. Oettinger 1979: 151)。しかしながらその先史は *zi-in-ni-z[i]* よりも複雑である。Melchert (1984: 36) は子音に続く  $*-uR_2-$  が  $uR$  になるという理由から、 $*dhur-né-h_1-ti$  は *du-ua-ar-ni-zi* ではなく、*durne-* になると考えた。たとえば *hulle-* ‘smash, fight’ (<  $*h_2ul-né-h_1-$ ) を参照されたい。したがって彼は名詞派生動詞3人称単数  $*dhurne-je-ti$  を再建した。他方、Yoshida (1998: 611) は *du-ua-ar-ni-zi* にみられる母音間のシングルな  $-z-$  を説明するために、 $*-ti$  の直前にアクセントのある短母音  $é$  を建てることを回避し、使役の接尾辞  $*-éje-$  からの影響を受けた  $*dhurné-je-ti$  を再建した。しかしながら、この分析はいささかアドホックである。これに対して、Kloekhorst (2007: 456f., 2008: 907) は、3人称複数の  $*dhur-n-h_1-énti$  はヒッタイト語で *duarnanzi* になると考えた<sup>14</sup>。そしてこの3人称複数の語幹が類推によって3人称単数に広がった結果、*duarnazi* が二次的につくられ、予想される *durnezi* (<  $*dhur-né-di$  <  $*dhur-né-ti$  <  $*dhur-né-h_1-ti$ ) に取って代わったという説得力のある説明を施した。

つぎに、後のコピーに記録されている残りの3つの例について分析を施す。*na-ak-ke-e-zi* について Riemschneider (1970: 60) は書記による *na-ak-ke-e-eš-zi* の書き誤りであると述べている。しかしながら Watkins (1973: 72ff.) は *na-ak-ke-e-zi* が書き誤りではなく、印欧祖語の静態相 (stative) の接尾辞  $*-éh_1-$  を含む貴重な形式であることを証明した。したがって、アクセントのある長母音の後で子音の第1弱

<sup>13</sup> 子音の弱化については Eichner (1973) と Morpurgo Davies (1982/3) を参照。ヒッタイト語 *i-e-zi* に対応するリュキア語 *adi, edi*、楔形文字ルウイ語 *a-ti*、象形文字ルウイ語 *á-tà, á-ra+a*、およびヒッタイト語 *pi-hu-te-zi* に対応するリュキア語 *tadi* ‘puts’ でも子音の弱化がみられる。象形文字ルウイ語では  $r$ -音化 (rhotacism) がみられるが、 $*t > *d > r$  と変化したと考えられる。 $d$  が  $r$  に変化する現象は類型論的にもよくみられる。たとえば、ギリシア語 Pamphylian 方言やインドの諸方言に観察される。

<sup>14</sup> Kloekhorst によると  $*CuRV$  と  $*CuRCV$  という連続は、ヒッタイト語でそれぞれ  $CuRV$  と  $CuRCV$  になる。しかし  $*CuRCC$  という連続は  $CuwaRCC$  / $CuRCC$ / になる。たとえば、*kuṣarške/a-* ‘cut (imperfective)’ は  $*k^u_r-ske/o-$  から導かれる。同じ音節化 (syllabification) が3人称複数の *duarnanzi* (<  $*dhur-n-h_1-énti$ ) にも起こった。



化規則が作用した結果、\*-di という語尾をアナトリア祖語に想定することができる (\*-ǎ-di < \*-ǎ-ti < \*-ǎh-ti)。残りの2例はともに na-ak-ku-uš-ši-e-zi である。いずれも欄外をも使いながら行末に書かれているために、粘土板上のスペース不足のためにシングルの -zi が使われている可能性が考えられる。

以上の分析から、言語学的要因によって -i/e-zi と書かれた、古期ヒッタイト語のオリジナル粘土板に記録された4つの動詞 (ú-e-mi-zi, i-e-zi, pí-ḫu-te-zi, zi-in-ni-z[i]) および後のコピーに記録された2つの動詞 (du-qa-ar-ni-zi, na-ak-ke-e-zi) は、すべてアナトリア祖語の時期に有声の \*d を含む語尾 \*-di によって特徴づけられていたことが明らかになった。\*-di と再建される語尾とシングルの -z- を持つ古期ヒッタイト語の語尾とのあいだの歴史的な結びつきは否定することができない。すなわち、\*-ti と同様に、\*-di も前ヒッタイトの時期に破擦音化を蒙ったのである。ヒッタイト語においてダブルで書かれる閉鎖音がアナトリア祖語の無声音を、シングルで書かれる閉鎖音が有声音を反映しているのと同様に、本来 -i/ez-zi という語尾はアナトリア祖語の \*-ti に遡る \*-tsi を、-i/e-zi という語尾はアナトリア祖語の \*-di に遡る \*-dzi を反映していた。破擦音化によってつくられた2つの語尾 \*-tsi と \*-dzi のうち、前者がヒッタイト語内部の歴史において広く二次的に一般化されたが、少なくともうえで分析した6つの動詞は古期ヒッタイト語の時期に古い状態を保持したまま、類推による全面的な画一化を拒んでいたと考えられる。

### 4.3. -u-zi を持つ動詞

4.1 節の終わりで示したように、古期ヒッタイト語のオリジナルの粘土板 (OS) にはシングルの -z- を持つ -u-zi で終わる動詞が3例あった。それらは ar-nu-zi と iš-pár-nu-zi (2例) である。4.2 節でみたように、古期ヒッタイト語のオリジナルの粘土板において -i/e-zi という形式はすべて弱化した語尾に対して用いられており、弱化していない語尾に対して用いられている例は皆無であった。さらに4節で示した表から明らかなように、古期ヒッタイト語のオリジナルの粘土板には、シングルの -z- を持つ -a-zi で終わる動詞は記録されていない。これらの事実が示唆することは、うへの ar-nu-zi と iš-pár-nu-zi にみられるシングルの -z- も言語学的要因によるという見方である。さらに、古期ヒッタイト語のオリジナルの粘土板において簡略綴りが用いられていたという根拠がほかに見当たらないこともこの見方を有力にする。

アナトリア祖語の \*u と二重母音 \*eu はヒッタイト語において u に融合した。この点に関連して考えなければならない問題は、ar-nu-zi と iš-pár-nu-zi にふくまれる接辞の -nu- が継承するのはアナトリア祖語における e- 階梯の鼻音接中辞 \*-né-u- であるのか、あるいは複数形の零階梯が一般化された \*-nú- であるのかである。もしアナトリア祖語の \*-né-u- に遡るのであれば、シングルの -z- を持つ -zi という語尾はアナトリア祖語に生じた子音の第1弱化規則によって \*-ti からつくられた \*-di を反映していることになる (子音の第1弱化規則は、アクセントのある長母音の後

だけでなく、アクセントのある二重母音の後でも作用した)。他方、もしアナトリア祖語の \**-nú-* に遡るのであれば、シングルの *-z-* に対して歴史的説明を施すことは困難になる。なぜならアクセントのある短母音のあとでは子音は弱化しないからである。また、他の古期ヒッタイト語のオリジナルの粘土板にはみられない簡略綴りに、その説明を求めることはアドホックである。さらに以下に示す分析結果は、*-nu-* がアナトリア祖語 \**-né-u-* に由来するという見方を強く支持する。

*ar-nu-zi* と *iš-pár-nu-zi* 以外の鼻音接中辞 \**-né-* を持つ動詞に注目してみよう。代表的な例は *ḫarni(n)k-* ‘destroy’, *ḫarnē-* ‘sprinkle’, *zinna-* ‘finish’, *duḫarni-* ‘break’ である。それぞれの動詞の現在 3 人称単数と 3 人称複数とそれらの祖形は以下のとおりである。

*ḫar-ni-ik-zi*, *ḫar-ni-in-kán-zi* < \**h<sub>2</sub>r-né-g-ti*, \**h<sub>2</sub>r-n-g-énti*<sup>15</sup>  
*ḫar-ni-e-ez-zi*, *ḫar-na-an-zi* < \**h<sub>2</sub>r-né-h<sub>1</sub>-ti*, \**h<sub>2</sub>r-n-h<sub>1</sub>-énti*<sup>16</sup>  
*zi-in-ni-z[i]*, *zi-in-na-an-zi* < \**si-né-h<sub>1</sub>-ti*, \**si-n-h<sub>1</sub>-énti* (あるいは \**ti-né-h<sub>1</sub>-ti*, \**ti-n-h<sub>1</sub>-énti*)  
*du-ḫa-ar-ni-zi*, *du-ḫa-ar-na-an-zi* < \**dh<sub>2</sub>r-né-h<sub>1</sub>-ti*, \**dh<sub>2</sub>r-n-h<sub>1</sub>-énti*

*ḫarni(n)k-*, *ḫarnē-*, *zinna-* については、単数形がアクセントのある *e-* 階梯の接中辞、複数形がアクセントのある *e-* 階梯の語尾を持つという祖形の特徴を基本的に保持している。*zi-in-ni-z[i]* にみられる語尾のシングルの *-z-* についてはすでに 4.2 節で論じた。またダブルの *-nn-* (< \**-nh<sub>1</sub>-*) は複数形からの影響を受けている (\**si-n-h<sub>1</sub>-énti* > *zi-in-na-an-zi*)。 *duḫarni-* については、3 人称単数 *du-ḫa-ar-ni-zi* が 3 人称複数から二次的な形態的影響を受けたことを 4.2 節で述べた。いずれにしても鼻音接中辞を持つ動詞の本来の母音交替のパターンがほぼ忠実に保たれている。したがって、うえで問題にしたシングルの *-z-* を持つ *ar-nu-zi* と *iš-pár-nu-zi* についても、3 人称単数 \**-né-u-ti*, 3 人称複数 \**-n-u-énti* という同じ母音交替を反映していると考えられる。すなわち、*ar-nu-zi* と *iš-pár-nu-zi* については複数の零階梯の接中辞 \**-nu-* が広がったのではなく、本来の \**-né-u-* (> *-nú-*) を継承しているとみなすのが妥当である<sup>17</sup>。

以上の分析から、古期ヒッタイト語のオリジナルの粘土板に記録されている *ar-nu-zi* と *iš-pár-nu-zi* は、\**i* の前で \**d* が破擦化したことを示すさらなる根拠となる。

<sup>15</sup> 3 人称複数形は、Oettinger (1979: 150ff.) によると若干の二次的変化を受けている。語尾 *-anzi* はアナトリア祖語の \**-enti* に遡る。

<sup>16</sup> この動詞の最初の音節文字は *ḫar* と *hur* とも読むことができる。多くの研究者は *ḫurnezzi*, *ḫurnanzi* と読んでいる (cf. Melchert 1984: 59)。しかしながら、Neu (1983: 55, note 261) や Kloekhorst (2008: 309) が指摘しているように、*ḫarnezzi*, *ḫarnanzi* と読むべきである。なぜなら 3 人称単数命令形が *ḫa-ar-ni-ja-ad-du* KUB 56.48 i 18 と綴られているからである。

<sup>17</sup> 鼻音接中辞には稀ではあるが、*ḫa-aḫ-nu-ú-mi* ‘I turn’ KBo 17.1 ii 18 (OS) のように、母音の重複 (溢音, *scriptio plena*) がみられる。この形式に含まれている溢音は、二重母音 \**eu* からつくられたアクセントのある長母音 *ū* を含む鼻音接中辞 *-nú-* (< \**-né-u-*) を表していると解釈できる。

両者の先史はつぎのようにまとめられる。

arnuzi < \*h<sub>1</sub>r̥-nū-di < \*h<sub>1</sub>r̥-né-u-di < \*h<sub>1</sub>r̥-né-u-ti  
išparnuzi < \*spr̥-nū-di < \*spr̥-né-u-di < \*spr̥-né-u-ti

この分析の帰結として、3人称単数現在形に関するかぎり、古期ヒッタイト語のオリジナルの粘土板には簡略綴りが皆無であることになる。古期ヒッタイト語オリジナルにみられる ar-nu-zi と後の時期にみられる ar-nu-zi は、ともにシングルの -z- を持っているにもかかわらず、まったく違った歴史を辿っている。前者は弱化した破擦音を表しているのに対して、後者は類推によって二次的に広がった非弱化解擦音が簡略綴りによって表記されているのである。

## 5. \*d の破擦化の他の例

前節で行った動詞語尾についての文献学および言語学的分析の結果、ヒッタイト語の先史において \*-ti のみならず \*-di も破擦化を受けたということが明らかになった。動詞語尾以外から、この音変化を支持する根拠を引き出すことは容易ではない。なぜなら音変化によって生み出された結果が、パラダイム内部の他の位置からの形態的影響を二次的に受けていることが多いからである。たとえば、kard- ‘heart’ の単数与・位格 kardi (< \*k<sup>h</sup>ord-i) はうへの音変化が働く構造記述を満たしているが、z が現れていない。その理由は他の格の形式、たとえば単数奪格 kartaz などからの影響によって d が z に代わって復活したためである。しかしながら以下に示す3つの事例は \*d が i あるいは j の前で破擦音化したことに対するさらなる根拠となる。

### 5.1. ma-a-ni-za というシンタグマ

法律文書の古期ヒッタイト語のオリジナルの粘土板には、ma-a-ni-za KBo 6.2 i 6 と綴られるシンタグマが記録されている<sup>18</sup>。そこには接続詞 mān ‘when’ のあとに2つのクリティック =i (< \*oi) ‘they’ と =za が付与されている。注目しなければならない事実は、母音間でシングルの -z- が書かれている点である。すでに述べたように、IZ という文字は3画の単純な文字である。また古期ヒッタイト語の書記が簡略綴りを用いたことを示す根拠は見当たらない。さらにこのシンタグマは行末に書かれていない。したがって、ma-a-ni-IZ-za から IZ が省略されたとは考えられないために、ma-a-ni-za に含まれているシングルの -z- は純粋に言語学的要因によるものであると解釈できる。ma-a-ni-za はアナトリア祖語の \*mān=oi=ti に遡る。再帰小辞の \*-ti の直前の母音にはアクセントがないために<sup>19</sup>、\*-ti は子音の第2弱化解

<sup>18</sup> このシンタグマは mān=i=z ‘when-they-reflexive’ と形態素分析され、文字 za に含まれる母音はダミーである。= という記号は直後の形式がクリティックであることを示す。

<sup>19</sup> クリティックはアクセントを持たないことに留意されたい。

を受けた結果、\*-di になった。さらに後に破擦化と語末母音脱落 (apocope) を蒙ったと分析できる (\*-ti > \*-di > \*-dzi > \*-dz)。

## 5.2. 古期ヒッタイト語の nu-uz および nu-uz-za

5.1 節で言及したヒッタイト語の再帰小辞は、-Vz あるいは -za と綴られるが<sup>20</sup>、接続詞 (sentence connective) nu- に続くとき、後期ヒッタイト語では通常 nu-za と書かれる。古期ヒッタイト語のオリジナルの粘土板では、この nu-za というスペリングもみられるが、あまり多くない<sup>21</sup>。その代わりに、nu-uz, nu-uz-za という別の2つのスペリングが一般的である<sup>22</sup>。再帰小辞の -Vz と -za の歴史的な分布については、これまでいくつかの研究が発表されている。その代表的なものは、Carruba, Souček and Sternemann (1965), Hoffner (1972), Hoffner (1983), Melchert (1980) それに Kühne (1988) である。Carruba, Souček and Sternemann (1965: 8ff.) では、-az と -(Vz-)za の揺れは法律文書の古期ヒッタイト語のオリジナルにはみられるが、後の時代のコピーでは -za が一般化されていると述べている。Hoffner (1972: 32) も -az というスペリングが古期および中期ヒッタイト語の特徴であることを観察したうえで、-az が後期ヒッタイト語では通常みられないという同様の見解を示している (cf. Hoffner 1983: 190)。さらに、Melchert (1980: 91) は、古期ヒッタイト語に関する限りでは、再帰小辞が母音の後では -Vz、子音の後では -za と書かれるというはっきりした傾向があることを述べている<sup>23</sup>。彼はまた、-za の後に文小辞 -šan がくるとき -za-an と書かれることを根拠にして (-za + šan [-ts-san] > -za-an [-tsan]), -za に含まれる母音の a は書記法のうえでの制約によるもので、実際には発音されていなかったと考えている<sup>24</sup>。Kühne (1988: 203ff.) は、この問題についてのもっとも包括的な研究であり、-za と -az の分布に関するそれまでの観察が正しいことを示している。つまり、後期ヒッタイト語でも -az がなお少数記録されているが、全般的には -az から -za への移行がヒッタイト語の歴史のなかで生じたこと、また -za に含まれている母音はダミーであることを主張している。

それでは、再帰小辞にみられる -Vz から -za への移行を動機づけるものは何であろうか。この問題は、Boley (1993: 10) に指摘があるように、なお未解決のま

<sup>20</sup> -Vz の母音部分は、先行する文字の末尾母音に通常一致する。

<sup>21</sup> 古期ヒッタイト語のオリジナルの粘土板で nu-za が用いられている個所は、KBo 6.2 i 15, KBo 25.103 i 2, KUB 31.143 ii 8, KBo 25.54 i 15 である。

<sup>22</sup> 古期ヒッタイト語において、nu-uz は KBo 17.36 iii 11 (OS), KBo 20.22 i 10 (OS), KBo 17.33, 4 (OS), ABoT 35, 8 (OS), KBo 3.40, 2 (OH/NS) にみられ、他方 nu-uz-za は KBo 6.2 i 6 (OS), KBo 6.2 i 47 (OS), KBo 6.2 ii 7 (OS), KBo 6.2 ii 32 (OS), KBo 22.2 Vs. 12, 13, 17 (OS), KBo 20.8 i 11 (OS), KBo 3.40, 13 (OH/NS), KBo 17.32, 11 (OH?MS), KUB 28.45 (OH/NS) にみられる。Carruba, Souček and Sternemann (1965: 8ff.), Melchert (1980: 91), Kühne (1988: 205ff.), Otten (1973: 31, note 58) も参照されたい。

<sup>23</sup> この傾向は、それより以前に Neu (1970: 93) によって指摘されている。

<sup>24</sup> 同様の見方が、Neu (1968: 145) にもみられる。

までである。先行研究のうち、 $-Vz$  がヒッタイト語の歴史のなかで  $-za$  に取って代わられた要因やこれに関連した問題に具体的に触れているものは、Kühne (1988) と Melchert (1980) を除けば、見当たらない。Kühne (1988: 211, note 28) は、 $nu-uz-za$  というスペリングは  $nu-uz$  と  $nu-za$  の混成であると主張している。しかし、この可能性はすでに Melchert (1980: 91, note 2) によって否定されている。その理由は、この見方では古期ヒッタイト語のオリジナルに現われる  $nu-uz-za$  の例が説明できないからである。実際のところ、法律文書の古期ヒッタイト語のオリジナルにみられる  $nu-uz-za$  の例のうち 3 例は、後の時期のコピーの該当箇所では  $nu-za$  と書き改めている。

$nu-uz-za$  KBo 6.2 i 6 (OS) → [nu-]za KBo 6.3 i 13 (OH/MS)  
 $nu-uz-za$  KBo 6.2 i 47 (OS) →  $nu-za$  KBo 6.3 i 55 (OH/MS)  
 $nu-uz-za$  KBo 6.2 ii 32 (OS) →  $nu-za$  KBo 6.5 iv 15 (OH/NS)

したがって、 $nu-za$  は間違いなく  $nu-uz-za$  よりも新しいスペリングであり、 $nu-uz-za$  は  $-Vz$  と  $-za$  の混成ではありえない。これによって、 $nu-uz-za$  にみられるダブルの  $-zz-$  は古い特徴であるという Otten (1973: 31 note 58) の言明が正しいことが分かる<sup>25</sup>。

これに対して Melchert (1980: 92ff.) は、‘son, boy’ を意味する表意文字のヒッタイト語の音形を決定しようとした論文のなかで、 $nu-uz-za$  に関してつぎのような観察を行っている。彼の調査によれば、 $nu-uz-za$  が使われており、しかもつぎの語が音節文字で書かれている場合、その語は母音で始まっている。Melchert は、奪格語尾  $-az/za$  [tsy] が末尾にわたり音を持っていたという Kronasser (1956: 102) の提案を受け入れて、再帰小辞についても同じくわたり音があったと考え、 $nu-uz-za$  の最後の  $za$  は末尾のわたり音 ([nutsy V-]) を文字のうえで表わそうとする書記の工夫であると考えた。しかしながら、この解釈にはいくつかの問題がある。Kühne (1988: 211 note 28) は、この Melchert の見方に対して以下の 3 つの反対理由をあげている。まず、もしわたり音が実際に破擦音の後にあったなら、 $nu-uz-za$  ではなく、 $nu-uz-zi$  が予想される場所である。つぎに、同じく  $-za$  を持つ  $nu-za$  については、必ずしも母音で始まる語がつぎに来ない。最後に、別の接続詞である  $ta-$  を含む  $ta-az$  というスペリングの場合、 $-za$  が末尾にないにもかかわらず、母音で始まる語がつぎに来ることができる。この 3 つの反対理由のうち、最初のものがもっとも重大であるように思える<sup>26</sup>。

$nu-uz-za$  以外に、古期ヒッタイト語には接続詞と再帰小辞を含む別の 2 つのスペリングがある。それらは、 $nu-uz$  と  $ta-az$  である。 $nu-uz$  については、それが使われ

<sup>25</sup> Kühne (1988: 210 note 28) 自身も、同じ論文のなかで  $nu-uz-za$  の  $-zz-$  は古期ヒッタイト語のオリジナルか後のコピーにしかみられないと述べている。

<sup>26</sup> しかしながら、これらの反対理由によって、Melchert (1980) の主張の主眼点、 $ayawala-$  が ‘son, boy’ を意味するヒッタイト語であるという主張が無効になるわけではない。



ている個所は注 22 で示した。もうひとつの ta-az はつぎの個所に現われる<sup>27</sup>。

ta-az KBo 6.2 iii 8 (OS) → ta-az KBo 6.3 iii 10 (OH/MS), ta-za KBo 6.6 i 13 (OH/NS)  
 ta-az KBo XXV 13 II 10 (OS) → ta-az ABoT 9 i 12 (OH/MS), ta-az KBo 17.74 ii 32  
 (OH/MS)  
 ta-az StBot 25 Nr. 25 iv 4 (OS) → ta-az KBo 17.74 iv 11 (OH/MS)  
 ta-az KBo 20.8 Vs. 20 (OS), ta-az KBo 25.34 Vs. 22 (OH/?), ta-az KBo 25.37 Rs. 8 (OS),  
 ta-az KBo 25.38, 7 (OS), ta-az KBo 25.40, 6 (OS), ta-az KBo 25.65, 10 (OS),  
 ta-az KBo 20.18 Rs. 1 (OS), ta-az KBo 25.84 i 10 (OS)

nu-uz も ta-az も、古期ヒッタイト語以外のテキストには現われていない。ここで注意しなければいけないのは、機能が同じである接続詞 nu- と ta- に後倚辞が付与するとき、スペリングのうえでギャップがみられることである。nu-uz, na-aš ‘and-(s)he’, na-an ‘and-him (her)’ などに対応する ta-az, ta-aš, ta-an などは記録されている。しかしながら、nu-uz-za に対応する ta-az-za は一例も記録されていない。このアシメトリーが意味するところは何であろうか。その答を出すことは困難ではない。ta- が nu- よりも古い接続詞であることはよく知られている。-za がより新しい nu- を含むスペリングにはみられるが、より古い ta- を含むスペリングにはみられないことから、-za が付与されたのは比較的新しい時期であり、nu-uz のほうが nu-uz-za よりも古いスペリングであったと考えられる。

ここでなぜ古期ヒッタイト語の書記が nu-uz という連続に -za という文字を付け加えたのかという問題が出てくる。言い換えれば、nu-uz と nu-uz-za にみられるシングルの -z- とダブルの -zz- の違いは何によるのかという問題である。-za に含まれる母音 a は実際には発音されていなかったと考えられるために、nu-uz と nu-uz-za のあいだに言語変化があったとは考えられない。したがって、それらのあいだの違いは文字のうえのことだけであるに違いない。そうすると、nu-uz の末尾の破擦音が弱化していない (=閉鎖時間の長い子音である) ことを文字によって明瞭に示すために、-za が付与されたと考える以外には、納得のいく説明が得られないように思える。

これに対して、古期ヒッタイト語の nu-uz-za から後のヒッタイト語の nu-za への推移は、いわゆる簡略綴りによってもっともよく説明される。uz という文字は画数が比較的多いために、後期ヒッタイト語の書記はそれを省略して綴ったに違いない。この解釈の妥当性は、nu-za にみられる簡略綴りと軌を一にする現象が、すでに 4.1 節でみたように、3 人称単数現在動詞 ar-nu-zi などにもみられることから裏づけられる。

nu-uz-za というスペリングの問題に戻ると、それがアナトリア祖語の \*nú-ti から導かれたことは間違いない。この連続において、再帰小辞 \*-ti はアクセントのある

<sup>27</sup> 矢印 (→) の右側の形式は、後のコピーの該当個所に現われる形式である。

短母音に先行されているために<sup>28</sup>、子音の弱化規則は適用されなかった。したがって、*nu-uz-za* にみられるダブルの *-zz-* は、破擦化を受ける前の再帰小辞のヴァリエーション *\*-ti* を反映していると考えられる。

再帰小辞のルウィ諸語における発展については、アナトリア祖語に再建される *\*-ti* と *\*-di* のうち、楔形文字ルウィ語と象形文字ルウィ語では *\*-di* のほうを一般化した。楔形文字ルウィ語においては *-ti* の *t* は母音間でつねにシングルであらわれ、象形文字ルウィ語においては *-ti* とは別にロタシズムを蒙った *-ra/i*、*-ri+i* が使われているからである<sup>29</sup>。他方、リュキア語では *\*-ti* のほうが実質的に一般化されている<sup>30</sup>。

### 5.3. ヒッタイト語 *šiyatt-* ‘day’

ヒッタイト語 *šiyatt-* ‘day’ にみられる初頭の *š-* について、一般に広く受け入れられている祖形 *\*di<sub>u</sub>-ot-* からどのようなプロセスを経てつくられたのかは十分に明らかではない。ヒッタイト語研究のかなり以前の段階から、*\*d* が *\*i* の前で *š* になる現象は語頭に限られると考えられていた (*\*di<sub>u</sub>ot-* > *šiyatt-*)<sup>31</sup>。しかしながら、これまでの議論から語頭以外で *\*d* が *\*i* の前で破擦化するという新たな変化が明らかになった。したがって、*šiyatt-* にみられる *š-* は単一の規則によってつくられたのではなく、歴史的な順序づけのある3つの規則によってつくられ、その3つのなかに *\*d* の破擦化が含まれていたと考えられる。すなわち、*\*d* はまず破擦音 *\*dz* になり、つぎに閉鎖音部分が脱落し、最後に無声化を蒙り、*\*s* になったと考えることができる。ただそれでも問題が完全に解消されるわけではない。ひとつは、楔形文字ルウィ語と象形文字ルウィ語の対応形式がそれぞれ母音間でシングルの *-t-* とロタシズムを受けた *-r-* (< *\*-d-*) によって特徴づけられている点である (楔形文字ルウィ語単数与格 <sup>D</sup>UTU-*u<sub>a</sub>-ti* KUB 35.107 iii 11, 単数呼格 (?) *ti-u<sub>a</sub>-ta* KUB 35.19, 12; KUB 32.70, 6, *ti-u<sub>a</sub>-ta* KBo 7.68 iii 3, 象形文字ルウィ語単数奪格 DEUS.SOL-*ri+i*)。これらのシングルの *-t-* とロタシズムを受けた *-r-* は、ヒッタイト語 *šiyatt-* にみられる母音間のダブルの *-tt-* が指し示す *[-t-]* とは反対に、弱化した *[-d-]* ~ *[-r-]* を表わしている。もうひとつの問題は、*šiyatt-* は古期ヒッタイト語のオリジナルの粘土板に4例記録されているが、そのうちの3例は語根に *-i-* の溢音がみられる点である (単数主格 *ši-i-u<sub>a</sub>-az* KBo 17.15 Rs. 19, 属格 <sup>D</sup>*Ši-i-u<sub>a</sub>-at-ta-aš* KBo 17.15 Vs. 10, 位格

<sup>28</sup> サンスクリット語 *nú*、ギリシア語 *vu* などを参照。

<sup>29</sup> 象形文字ルウィ語では、子音の有声と無声を文字のうでで区別することができない。再帰小辞の *-ti* の場合は、その音価は *[di]* であり、そこから二次的にロタシズムを蒙った形式がつけられたと考えられる。

<sup>30</sup> リュキア語では、*-ti* 以外に *-di* が *-se/si* という小辞のあとでみられる。Morpurgo Davies (1982/83: 255, note 28) を参照。なお、5.2 節の議論は Yoshida (2001a) の内容を再検討したものである。

<sup>31</sup> Starke (1990: 143, 150) および Melchert (1994: 118f.) を参照。

ši-i-ua-at KBo 25.17 i 1)。Melchert (1994: 119) は、これらの例の語幹部分を šiuatt- (<\*diuot-) と読んでいるが、アクセントを有する零階梯の語根は当然問題となる。

筆者はうへの ši-i-ua-at-ta-aš などの語根が šiiuatt- を表わしていると解釈し、比較言語学的にはサンスクリット語の dyut- ‘shine’ に比定されると考える。このサンスクリット語の形式においては、語根も接尾辞も零階梯で現れているが、語頭の子音結合 \*di- はそのままのかたちで保存されている<sup>32</sup>。共時的な観点からは、ヒッタイト語 šiiuatt- (šiuatt-) も、これと対応する楔形文字ルウィ語 tiuat-, サンスクリット語 dyut- も、強語幹と弱語幹のあいだに母音交替がみられない<sup>33</sup>。しかしながら、起源的には強語幹と弱語幹が母音交替によってそれぞれ違った形式を示していたに違いない。そのように考えなければ、ヒッタイト語にみられる弱化していない -tt- (<\*t-) に対する楔形文字ルウィ語の弱化した -t- (<\*d-) および象形文字ルウィ語のロタシズムを受けた -r- に対して、一貫性のある説明を与えることができない。

つぎに考えなければならないのは、これらの名詞が本来示していた母音交替のタイプを明らかにすることである。ヒッタイト語 šiiuatt- でも、楔形文字ルウィ語 tiuat- でも、接尾辞の母音として a が使われている。この a は印欧祖語の \*o に由来するが、そうするとこれらの名詞は本来、amphikinetic タイプの母音交替を示していた可能性が強く示唆される。amphikinetic タイプは、強語幹がアクセントのある e- 階梯とアクセントのない o- 階梯、弱語幹が零階梯の語根と接尾辞およびアクセントのある e- 階梯の語尾で特徴づけられる<sup>34</sup>。この見方をとるならば、印欧祖語ではつぎの母音交替を示していたことになる。単数対格 \*diéu-ot-m̄, 単数属格 \*dju-t-és。サンスクリット語 dyut- では単数属格に代表される弱語幹 \*dju-t- が名詞パラダイムに一般化された結果、共時的な母音交替が失われたと考えられる。他方、アナトリア語派においては、強語幹と弱語幹のあいだでレベリングが生じたと考えられるなら、驚くほど簡潔な説明が得られる。この分析では、アナトリア祖語につぎのような強語幹と弱語幹がつくられたことになる。

単数対格 印欧祖語 \*diéu-ot-m̄ > アナトリア祖語 \*diéuot-m̄ > \*diéuod-m̄

単数属格 印欧祖語 \*dju-t-és → アナトリア祖語 \*diéu-ot-és > \*diéuot-és

強語幹と弱語幹とのあいだのレベリングの後、アナトリア祖語に生じた子音の第2

<sup>32</sup> 溢音を持たない šiuatt- は、アクセントのない語根母音 i の語中での脱落 (syncope) の後で šiiuatt- に含まれる i の母音化によって二次的につくられたと考えられる。アクセントのない母音の脱落は、ヒッタイト語でしばしば見受けられる。たとえば、lahlahh(i)ia- ‘gallop’ に対する lahlahhinú- ‘cause to gallop’, šiiattar ‘seal’ に対する šittar(i)ia- ‘send by a sealed document’ などを参照されたい。またおひとりの査読者からは、ji という音連続を避けるために i が落ちたという可能性をご指摘いただいた。

<sup>33</sup> 一般に、強語幹は主格、呼格、対格それに単數位格に、弱語幹は他の位置に現れる。

<sup>34</sup> amphikinetic タイプは、たとえばアヴェスタの ‘path’ を意味する名詞に忠実に保存されている。単数主格 pantā (<\*pantās < 印欧祖語 \*pént-oh₂-s), 単数属格 paθō (<\*pathas < 印欧祖語 \*pnt-h₂-és)。

弱化規則によって、強語幹は弱化した \*d を持つ \*d̪i̯eud- になる一方、弱語幹には弱化が生じず \*d̪i̯eṽ-ot-és が保たれた。後に、楔形文字ルウィ語と象形文字ルウィ語では強語幹がパラダイム全体に広がった（アナトリア祖語の \*e はルウィ語で i になる）。それに対して、ヒッタイト語は逆に弱語幹が一般化された。アクセントのない \*e と弱化していない \*t を持つ弱語幹 \*d̪i̯eṽ-’ は、規則的な音変化によって実際に記録されている古期ヒッタイト語の ṣi̯uatt- になる。

この節の冒頭で述べた、ヒッタイト語 ṣi̯uatt- をめぐる 3 つの未解決だった問題は、この名詞の祖形に amphikinetic タイプの母音交替を再建し、後にレペリングの影響を受けたと考えることによって自然に説明することができる (\*d̪i̯eṽ-ot-m/\*d̪i̯eṽ-t-és → アナトリア祖語 \*d̪i̯eṽ-ot-m/\*d̪i̯eṽ-ot-és → \*d̪i̯eud-/\*d̪i̯eṽ-’)。ヒッタイト語とルウィ語は、それぞれの個々の歴史において、前者は \*-t- を持つ弱語幹を、後者は \*-d- を持つ強語幹をパラダイム全体に一般化した。本稿での主眼の問題と特に関連する、ṣi̯uatt- の語頭の ṣ- については、\*d̪i- から破擦化、語頭子音連続の簡略化それに語頭子音の無声化によって説明される (\*d- > \*dz > \*z- > \*s-) <sup>35</sup>。ヒッタイト語の先史で \*d に破擦化が生じたことに対する根拠は、この事例からも得られるのである。

## 6. 潜在的な反例

これまでの議論では、ヒッタイト語の先史において \*d が \*i と \*i̯ の前で破擦化したことを示そうとした。この音変化に対する潜在的な反例として唯一重大と考えられるのは、中・受動態過去語尾に付与される -ti という小辞である。この形式は、その t が母音間でつねにシングルで書かれているために \*d に遡る短い（弱い）子音と考えられるが（たとえば、ḫu-it-ti-ja-ti ‘(s)he drew’ KBo iii.22 Rs. 54) <sup>36</sup>、破擦化を受けていない <sup>37</sup>。以下、この節では、破擦化を蒙っていないこの -ti が、どのようにして \*di > \*dzi という音変化と矛盾を引き起こさずに説明できるかという問題を考えていきたい。

中・受動態過去の -ti という小辞の起源についてのこれまでの研究は、2 つの立場に分かれている。ひとつは基本的に Pedersen (1938: 108f.) や Watkins (1969: 78) によって取られているものであり、後に Oettinger (1997: 413ff.) によってより具体的に論じられている。この見方は、-ti をサンスクリット語 ihi、ギリシア語

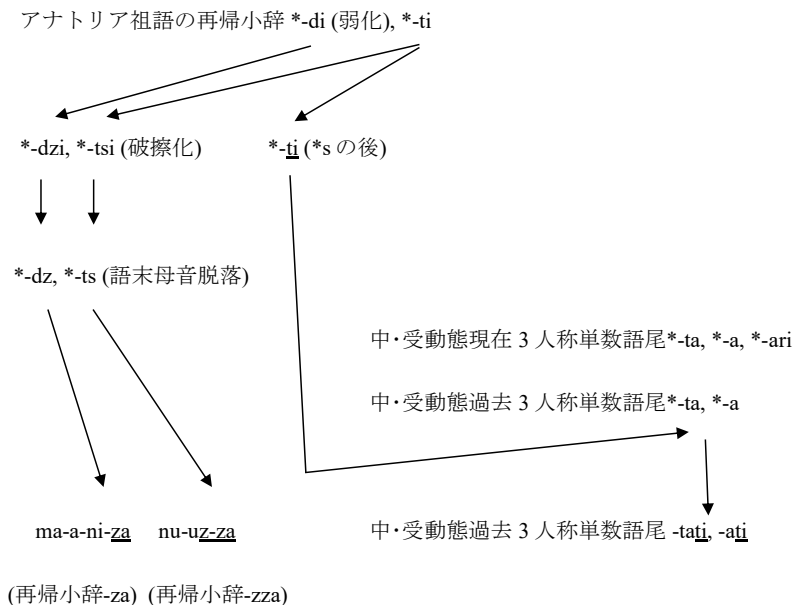
<sup>35</sup> 語頭子音の無声化については、注 6 ですでに述べた。なお、5.3 節での考察は Yoshida (2000) のなかで本稿に関連する箇所を再検討したものである。

<sup>36</sup> 古期ヒッタイトの時代に記録された「アニッタ文書」の後期ヒッタイトのコピーには、ḫu-it-ti-it-ti KUB 26.71 i 15 という中・受動態動詞がある。この形式は t がダブルで書かれている点で不可解である。Yoshida (2014) では、この形式が書記の書き誤りであること、およびその書き誤りを犯した理由が詳細に示されている。

<sup>37</sup> ヒッタイト語の現在中・受動態語尾の 2 人称単数 -tati、さらに 1 人称複数 -qaštati には同じ -ti という要素が含まれている。しかしこれらの現在形にみられる -ti は、ヒッタイト語内部の歴史で -ri に取って代わったものであり、いずれも後期ヒッタイト語に特徴的な要素である。後期ヒッタイト語の現在中・受動態で、-ri の代わりに -ti が使われるようになったプロセスと原因については、Yoshida (1987) で詳しく論じられている。

i9t, ヒッタイト語 it (< \*hi-dhi 「あなたは行け」) などにみられる 2 人称単数命令形語尾 \*-dhi と歴史的に関係づけようとするものである。この立場では、印欧祖語の小辞 \*-dhi に含まれている有声帯気音は破擦化しなかったことになる。しかしながら、2 人称単数命令形語尾がなぜ中・受動態過去語尾に付与されるようになったのか、両者の機能的な隔たりが説明できない。

もうひとつは、-ti がアナトリア祖語の再帰小辞 \*-ti に遡るとする立場である。この見方は Neu (1968: 144ff.) によってまず提案され、後に Melchert (1992: 192) や Yoshida (2001b: 87ff.) によって補強された。この見方が魅力的である理由は、意味・機能的な観点からすれば、中・受動態は命令形ではなく、再帰小辞と自然な結びつきがあるからである。-ti がシングルの -t- を含むことについて、Melchert は、アナトリア祖語の時期に再帰小辞 \*-ti は中・受動態動詞過去形語尾に付与されるようになり、そのあとアクセントのない母音間で作用した子音の第 2 弱化規則によって \*t は \*d となったと説明している。これに対して、Yoshida (2001b) の見方は、Melchert (1992) の見方と部分的に異なっている。その理由は、無声の \*t が \*i の前で破擦化したのと同様に、有声の \*d も \*i の前で破擦化したという立場に立っているからである。以下の図をみられたい。



この図で示されているように、アナトリア祖語の再帰小辞として \*-ti と弱化した \*-di の 2 つが再建される。両者はヒッタイト語の先史において、破擦化と語末母音脱落を蒙った結果、古期ヒッタイト語に -za および -zza というかたちで残ってい



る<sup>38</sup>。一方で、アナトリア祖語の再帰小辞\*-tiは\*sの後では、弱化も破擦化も受けず、\*-tiのままでも存続していた<sup>39</sup>。他方、中・受動態語尾については、3人称単数の\*-ariを除いては、現在形とそれに対応する過去形は形式のうえで区別されていない<sup>40</sup>。したがって、その機能的位置が明瞭にマークされていない過去形は、現在形から体系的に区別される必要があったと推定できる。この状況を救うために、\*sの後で存続した再帰小辞\*-tiは、その再帰小辞としての本来の位置を離れ、中・受動態過去語尾に付与されるようになったと考えられる<sup>41</sup>。

以上の分析が正しいとしても、なお重大な問題がひとつ残っている。それは、ヒッタイト語中・受動態過去の-ti [di]がなぜ弱化した歯茎音を持つようになったかに対する説明である。この問題に関しては、さらに新たな分析が必要になってくる。一般に、アクセントのある長母音の後で働いた子音の第1弱化規則は、分派諸言語で\*h<sub>2</sub>が母音と閉鎖音のあいだで消失し、先行母音が代償延長を受けたときには、もはや共時的規則として残っていなかったと考えられている。たとえば、弱化していない歯茎音を持つリュキア語 *prīnawate/e* ‘built’ (< \*prnoūéh<sub>2</sub>-to) や楔形文字ルウィ語 *tatta* ‘stood’ (< \*(s)téh<sub>2</sub>-to) をみられたい<sup>42</sup>。しかしながら、アクセントのない母音間で働いた第2弱化規則については、少なくとも楔形文字ルウィ語とリュキア語の先史ではなお存続していた<sup>43</sup>。たとえば、楔形文字ルウィ語 *aggat(i)-* ‘hunting net’ (< \*ékad- < \*ékat- < \*ékt-; cf. ヒッタイト語 *ékt-*) は、語中の子音間に母音 a が挿入された後、アクセントのない母音間で弱化が起こったと考えられる。さらに、リュキア語 *ap[p]di* あるいは *ap[d]di* ‘seizes’ (< \*épadi < \*épati < \*épti; cf. ヒッタイト語 *ēpp-*) についても、後に語中音脱落が起こっているが、うへの楔形文字ルウィ語 *aggat(i)-* とまったく並行的な変化が生じている。このように子音の第2弱化規則は

<sup>38</sup> 図のなかの *ma-a-ni-za* と *nu-uz-za* に含まれている -z- と -zz- に注目されたい。それぞれの形式については、5.1 節と 5.2 節で考察した。

<sup>39</sup> その根拠として、*palḫašti* 「広さ」に代表されるような -ašti- という抽象名詞を派生する接尾辞を持つ中性名詞に破擦化がみられないことがあげられる。これについては、Sturtevant (1951: 60f.), Kronasser (1966: 53), とりわけ Joseph (1984) を参照されたい。典型的には、古高地ドイツ語に生じたゲルマン語の第2子音推移に同様の現象がみられる(ドイツ語 *Zeit* に対して *stehen* など)。実際のヒッタイト語では *nu-uš-za* ‘and-them-(reflexive)’, *na-aš-za* ‘and-he-(reflexive)’, *nu-naš-za* ‘and-us-(reflexive)’, *nu-šmaš-za* ‘and-you/them-(reflexive)’ にみられるように、s の後に再帰小辞 -za が後続する例が数多くある。これらの例の -za は、本来の \*-ti に二次的に取って代わったものに違いない。

<sup>40</sup> -ri という要素がみられるのが、アナトリア祖語において直前の母音にアクセントがある3人称単数中・受動態動詞に限られていたことについては、Yoshida (1990: chapter 5) を参照されたい。

<sup>41</sup> 再帰小辞の3つのヴァリエントのなかで、なぜ\*-tiが選ばれ、破擦化した\*-tsiと\*-dziが選ばれなかったのかという理由は明らかである。すなわち、\*-tsiと\*-dziは、3人称の能動態現在語尾の末尾の要素(-zzi, -zi)と同音であるために、機能的不明瞭さがもたらされるからである。

<sup>42</sup> Melchert (1994: 69) を参照。ただし Melchert (2007) では、この見方を取り下げている。

<sup>43</sup> 詳しくは、Melchert (1994: 277, 313) をみられたい。

楔形文字ルウィ語とリュキア語におお観察されるために、これら2つの言語よりもいっそう古い時期に記録されたヒッタイト語の先史にも残っていたと考えることには何ら無理はない。実際のところ、ヒッタイト語中・受動態の小辞 *-ti* の歯茎音はほとんどつねにアクセントのない母音間にあるため、第2弱化規則が作用する構造記述を満たしている。弱化が働かなかったと考えられる唯一の例外は、アクセントの落ちる *\*-o* という語尾を持つ少数の3人称単数の形式である。しかし、この場合も音韻的に予想される *\*-ti* は、類推によって容易に *\*-di* に取って代わられる<sup>44</sup>。以上の議論によって、中・受動態の *-ti* にみられる弱化した歯茎音は第2弱化規則によるものと考えられる。

以上が、中・受動態過去語尾に付与される弱化した *t* を持つ *-ti* がなぜ破擦化しなかったかという問題に対する説明である。

## 7. 結論

ヒッタイト楔形文字が音節文字として用いられる場合、ひとつの文字は V, CV, VC, CVC という音節構造のいずれかしか表わさない。この文字体系は、子音連続を多く持つ印欧祖語から分岐したヒッタイト語を表記するうえで、きわめて不都合であった。さらに有声子音を含む文字と無声子音を含む文字は、ひとつの語のなかでかなり自由に交替するために (e-eš-du ~ e-eš-tu 'let him be'), 印欧祖語の子音の有声と無声の対立は子音の長さの対立に置き換わったと考えられる。ヒッタイト語において印欧祖語の無声音は一般に長く、有声音は短く表記される。子音の長さの対立は、閉鎖音、摩擦音、共鳴音、喉音 (laryngeal) においてみられるとこれまで考えられており、破擦音については長さの対立はないとされていた。本稿では、近年めざましく発展しているヒッタイト語文献学の成果に基づいて粘土板を古期ヒッタイト、中期ヒッタイト、後期ヒッタイトに綿密に分類し、共時的な観点からそれぞれの時期の文法特徴を明らかにしたうえで、通時的な考察を試みた。さらにアナトリア語派以外の印欧諸言語だけでなく、楔形文字ルウィ語、象形文字ルウィ語、リュキア語という他のアナトリア諸言語に見出される言語特徴も視点に入れて、比較言語学的分析を進めた。その結果、以下の知見が引き出された。

印欧祖語の *\*-ti* に遡る、ヒッタイト語の母音語幹動詞の3人称現在形を包括的に調査した結果、古期ヒッタイト語のオリジナルの粘土板では、多くの場合 *-Vz-zi* というダブルの *-zz-* を持つ形式がみられる。これは印欧祖語 *\*-ti* が破擦化を受けたことを反映している。一方で、少数ではあるが *-IZ-zi* というダブルの *-zz-* ではなく、シングル *-z-* を持つ *-i/e-zi* という語尾によって特徴づけられる *i/e-* 語幹動詞の形式もみられた。非言語学的な要因からシングル *-z-* で書かれている可能性がある

<sup>44</sup> 3人称複数中・受動態語尾 *\*-ntó* の場合は、前ヒッタイト語の時期に、ヴェーダのサンスクリット語の場合と同様に、アクセントが *\*-o-* から *\*-n-* に移ったこと (*\*-ñto*) を裏付ける独自の根拠がある (Yoshida 1990: 114)。

例を除外し、確実に言語学的要因によって *-V-zi* と書かれている例を分析すると、それらはアナトリア祖語の時期に生じた子音の弱化規則によってつくられた *\*-di* に遡ることが分かった。この分析によって、*\*-ti* だけでなく *\*-di* にも破擦化が生じ、古期ヒッタイト語において *-zz-* と *-z-* のあいだに音韻的な対立があったことになる。さらに *u-* 語幹動詞にもシングルの *-z-* を持つ、*-u-zi* という語尾がみられる。三画からなる単純な *IZ* とは異なり、*uz* という文字はかなり画数の多い複雑な文字である。中期ヒッタイト語以降は *uz* を省略して *-u-zi* と書く、いわゆる簡略綴りが顕著になるが、古期ヒッタイト語に書記が簡略綴りを使用したという根拠はない。古期ヒッタイト語のオリジナルの粘土板にあらわれる *-u-zi* を持つ動詞を比較言語学的に分析すると、この場合も弱化規則を受けたアナトリア祖語の *\*-di* に由来することが分かった。

*\*d* の破擦化がみられるのは動詞語尾に限られているわけではない。少なくとも以下の3つの事例は、さらなる破擦化の根拠となる。ひとつは古期ヒッタイトのオリジナルの粘土板にみられる、*ma-a-ni-za* (= *mān=i=z* ‘when-they-reflexive’) というシンタグマである。これは接続詞 *mān* に2つのクリティックが付与された *\*mān=oi=ti* に遡る。再帰小辞の *=ti* はアクセントのない母音間で弱化し *\*=di* となり、後にヒッタイト語で破擦化し、シングルの *-z-* で書かれている。2つ目の根拠は、接続詞 *nu* と再帰小辞の連続にかかわるスペリングにみられる。古期ヒッタイト語には *nu-uz* と *nu-uz-za* というスペリングがみられる。他方、*nu* よりも時期的に古い接続詞 *ta* には *ta-az* というスペリングだけで、*nu-uz-za* に対応する *ta-az-za* は一例もない。このことから *nu-uz-za* は *nu-uz* よりも新しいスペリングであることが分かる。*nu-uz* に *-za* が付与された理由としては、*nu-uz* (< *\*nú-ti*) の末尾の破擦音が弱化していないことを文字によって明瞭に示すために、書記が *-za* を付与したと考える以外に納得のいく説明は得られない。つまり古期ヒッタイト語の破擦音には長短の対立があったことを示している。3つ目の根拠は *šiuatt-* ‘day’ という名詞にみられる初頭の *š-* から導き出される。*šiuatt-* はサンスクリット語の *dyut-* ‘shine’ に比定されるが、語頭の *š-* は単一の規則によってつくられたのではなく、歴史的な順序づけのある3つの規則によってつくられ、その3つのなかに *\*d* の破擦化が含まれていたと考えられる。すなわち、*\*d* はまず破擦音 *\*dz* になり、つぎに閉鎖音部分が脱落し、最後に無声化を蒙り、*\*s* になったと分析することができる (*\*d̥jeuot-’ > \*dz̥jeuot- > \*zi̥jeuot- > \*ši̥jeuot- > š̥iuatt-* [syiwatt-])。

以上は *\*d* が *\*i* と *\*i̥* の前で破擦化したことを示す根拠であるが、この音変化に対する潜在的な反例にみえるケースがある。それはヒッタイト語中・受動態過去語尾に付与される *-ti* という小辞である。この *-ti* が破擦化していない理由は以下のように説明される。アナトリア祖語の段階においては、*\*-ti* とは別に *\*-ti* から弱化規則によってつくられた *\*-di* という2つの再帰小辞が存在していた。ヒッタイト語の先史においては、*\*-ti* と *\*-di* は破擦化を受けた結果、それぞれ *\*-tsi* と *\*-dzi* になった。ただし、*\*s* の後では破擦化は生じなかった。さらに、*\*-tsi* と *\*-dzi* は語末の *\*-i* を失

い、\*-ts と \*-dz に変化した。この両者は、それぞれうえに示した古期ヒッタイト語の nu-uz-za にみられるダブルの -zz- と ma-a-ni-za にみられるシングルの -z- に忠実に反映されている。\*s の後で破擦化を免れた \*-ti は、中・受動態現在語尾との形式のうえでの区別を明瞭にするために、後に中・受動態過去語尾に付与されるようになった。さらに、この \*-ti は前ヒッタイト語の時期になお残っていた子音の第2弱化規則によって \*-di になった。

これまでの研究では、ヒッタイト語の破擦音にはほかの子音と異なり閉鎖時間の長短の対立がないとされていた。この見方に対して、少なくとも古期ヒッタイト語においてはその対立が残っていたことを裏づける根拠があることを本稿で指摘した。閉鎖時間の短い破擦音がアクセントを持たない短母音の後とアクセントを持つ長母音の後にみられるのに対して、閉鎖時間の長い破擦音はアクセントを持つ短母音の後だけでなく子音語幹動詞にも予想されることから、閉鎖時間の長い破擦音は閉鎖時間の短い破擦音よりも広く分布していた。したがって、後の時期のヒッタイト語において能動態語尾は閉鎖時間の長い -zz- を一般化した。中・受動態3人称単数現在語尾について、長い -tta が一般化されていることも同じ事情による<sup>45</sup>。歴史比較言語学の研究者のなかで文献学の重要性をおろそかにする者はいない。本稿では、詳細な文献学的分析と広い視点に立った比較言語学的分析が言語史の正確な理解にいかんにかに寄与するかを実証的に示した。

## 参考文献

- Boley, Jacqueline (1993) *The Hittite particle -z/-za*. Innsbruck: Institut für Sprachwissenschaft der Universität Innsbruck.
- Carruba, Onofrio, Vladimír Souček and Reinhard Sternemann (1965) Kleine Bemerkungen zur jüngsten Fassung der hethitischen Gesetze. *Archiv Orientalní* 33: 1-18.
- Eichner, Heiner (1973) Die Etymologie von heth. *mēhur*. *Münchener Studien zur Sprachwissenschaft* 31: 53-107.
- Hoffner, Harry (1972) A review of *The Records of the Early Hittite Empire (c. 1450-1380 B.C.)* by Philo H. J. Houwink ten Cate. *Journal of Near Eastern Studies* 31: 29-35.
- Hoffner, Harry (1983) A prayer of Muršili II about his stepmother. *Journal of the American Oriental Society* 103: 187-192.
- Joseph, Brian (1984) A note on assibilation in Hittite. *Die Sprache* 30: 1-15.
- Kloekhorst, Alwin (2007) The Hittite syllabification of PIE \*CuR and \*K<sup>h</sup>R. In: Detlev Groddek and Marina Zorman (eds.) *Tabularia Hethaeorum, hethitologische Beiträge, Silvín Košak zum 65. Geburtstag*, 455-457. Wiesbaden: Harrassowitz.
- Kloekhorst, Alwin (2008) *Etymological dictionary of the Hittite inherited lexicon (Leiden Indo-European etymological dictionary series, volume 5)*. Leiden: Brill.
- 河野六郎・西田龍雄 (1995) 『文字最良——文字のエッセンスをめぐる3つの対話』東京:三省堂。

<sup>45</sup> 厳密に考えるならば、能動態語尾の -zz- への一般化については -z- で表記される音素が体系から失われるのに対して、中・受動態語尾の -tt- への一般化は -t- で表記される音素が体系から失われてしまうわけではない。また -z- で表記される音素の消失について、類型論的立場からは現代標準日本語で無声破擦音が独立した音素として存在するのに対して、かつて存在した有声破擦音が消失した変化と相通じている。この点はおひとりの査読者から受けた指摘である。

- Kronasser, Heinz (1956) *Vergleichende Laut- und Formenlehre des Hethitischen*. Heidelberg: Carl Winter.
- Kronasser, Heinz (1966) *Etymologie der hethitischen Sprache* (Band 1). Heidelberg: Carl Winter.
- Kühne, Cord (1988) Über die Darstellung der hethitischen Reflexivpartikel -z, besonders in postvokalischer Position. In: Erich Neu and Christel Rüster (eds.) *Documentum Asiae Minoris Antiquae: Festschrift für Heinrich Otten zum 75. Geburtstag*, 203–233. Wiesbaden: Otto Harrassowitz.
- Melchert, H. Craig (1980) The Hittite word for “son”. *Indogermanische Forschungen* 85: 90–95.
- Melchert, H. Craig (1984) *Studies in Hittite historical phonology*. Göttingen: Vandenhoeck and Ruprecht.
- Melchert, H. Craig (1987) Relative Chronology and Anatolian: the vowel system. In: Robert Beekes, Alexander Lubotsky and Jos Weitenberg (eds.) *Rekonstruktion und relative Chronologie (Akten der Viii. Fachtagung der indogermanischen Gesellschaft, Leiden, 31. August–4. September 1987)*, 41–53. Innsbruck: Institut für Sprachwissenschaft der Universität Innsbruck.
- Melchert, H. Craig (1992) The middle voice in Lycian. *Historische Sprachforschung* 105: 189–199.
- Melchert, H. Craig (1994) *Anatolian historical phonology (Leiden Studies in Indo-European, volume 3)*. Amsterdam/Atlanta: Rodopi.
- Melchert, H. Craig (2007) Luvian evidence for PIE \*H<sub>3</sub>eit- ‘take along; fetch’. *Indo-European Studies Bulletin (University of California at Los Angeles)* 12 (1): 1–3.
- Morpurgo Davies, Anna (1982/83) Dentals, rhotacism and verbal endings in the Luwian languages. *Zeitschrift für vergleichende Sprachforschung* 96: 245–270.
- Neu, Erich (1968) *Das hethitische Mediopassiv und seine indogermanischen Grundlagen (Studien zu den Boğazköy-Texten, Heft 6)*. Wiesbaden: Otto Harrassowitz.
- Neu, Erich (1970) *Ein althethitisches Gewitterritual (Studien zu den Boğazköy-Texten, Heft 12)*. Wiesbaden: Otto Harrassowitz.
- Neu, Erich (1980) *Althethitische Ritualtexte in Umschrift (Studien zu den Boğazköy-Texten, Heft 25)*. Wiesbaden: Otto Harrassowitz.
- Neu, Erich (1983) *Glossar zu den althethitische, Ritualtexten (Studien zu den Boğazköy-Texten, Heft 26)*. Wiesbaden: Otto Harrassowitz.
- 西田龍雄編 (1986) 『言語学を学ぶ人のために』 京都：世界思想社。
- Oettinger, Norbert (1979) *Die Stammbildung des hethitischen Verbums*. Nürnberg: Verlag Hans Carl.
- Oettinger, Norbert (1997) Die Partikel -z des Hethitischen (mit einem Exkurs zu den Medialformen auf -t, -ti). In: Emilio Crespo and José Luis García Ramón (eds.) *Berthold Delbrück y la sintaxis indoeuropea hoy (Actas del Coloquio de la Indogermanische Gesellschaft, Madrid, 21-24 de septiembre de 1994)*, 407–420. Wiesbaden: Dr. Ludwig Reichert Verlag.
- Otten, Heinrich (1973) *Eine althethitische Erzählung um die Stadt Zalpa (Studien zu den Boğazköy-Texten, Heft 17)*. Wiesbaden: Otto Harrassowitz.
- Otten, Heinrich (1988) *Die Bronzetafel aus Boğazköy: Ein Staatsvertrag Tuthalijas IV*. Wiesbaden: Otto Harrassowitz.
- Pedersen, Holger (1938) *Hittitisch und die anderen indo-europäischen Sprachen*. København: Levin & Munksgaard.
- Riemschneider, Kaspar Klaus (1970) *Babylonische Geburtsomina in hethitischer Übersetzung. (Studien zu den Boğazköy-Texten, Heft 9)* Wiesbaden: Otto Harrassowitz.
- Starke, Frank (1990) *Untersuchung zur Stammbildung des keilschrift-luwischen Nomens (Studien zu den Boğazköy-Texten, Heft 30)*. Wiesbaden: Otto Harrassowitz.
- Sturtevant, Edgar H. (1951) *A comparative grammar of the Hittite language* (revised edition). New Haven: Yale University Press.
- Watkins, Calvert (1969) *Indogermanische Grammatik III/1: Geschichte der indogermanischen Verbalflexion*. Heidelberg: Carl Winter Universitätsverlag.
- Watkins, Calvert (1973) Hittite and Indo-European studies: The denominative statives in -ē-. *Transactions of the Philological Society* 1971: 51–93.
- Wilhelm, Gernot (2004) Hurrian. In: Roger D. Woodard (ed.), *The Cambridge encyclopedia of the world's ancient languages*, 95–118. Cambridge: Cambridge University Press.
- Yoshida, Kazuhiko (1987) The present mediopassive endings -tati and -qaštati in Hittite. *Die Sprache* 3:



29–33.

- Yoshida, Kazuhiko (1990) *The Hittite mediopassive endings in -ri* (*Untersuchungen zur indogermanischen Sprach- und Kulturwissenschaft* 5). Berlin: Walter de Gruyter.
- Yoshida, Kazuhiko (1998) Hittite verbs in *-Vzi*. In: Sedat Alp and Aygül Süel (eds.) *Uluslararası Hititoloji Kongresi Bildirileri, Çorum 16–22 Eylül 1996*, 605–614. Ankara: Grafik, Teknik Hazırlık Uyum Ajansı.
- Yoshida, Kazuhiko (2000) The original ablaut of Hittite *siyatt-*. *Münchener Studien zur Sprachwissenschaft* 60: 175–184.
- Yoshida, Kazuhiko (2001a) Hittite *nu-za* and related spellings. In: Gernot Wilhelm (ed.) *Akten des IV. Internationalen Kongresses für Hethitologie, Würzburg, 4.–8. Oktober 1999*, 721–729. Wiesbaden: Otto Harrassowitz.
- Yoshida, Kazuhiko (2001b) On the prehistory of the Hittite particle *-ti*. *Indogermanische Forschungen* 106: 84–93.
- Yoshida, Kazuhiko (2014) Hittite *hu-it-ti-it-ti*. In: Piotr Taracha and Magdalena Kapelus (eds.) *Proceedings of the eighth international congress of Hittitology, Warsaw, 5–9 September 2011*, 1034–1041. Warsaw: Agade.
- Yoshida, Kazuhiko (2017) Hittite verbs in *-nuzi*. In: Ivo Hajnal, Daniel Kölligan, and Katharina Zipser (eds.) *Miscellanea Indogermanica: Festschrift für José Luis García Ramón zum 65. Geburtstag*, 881–900. Innsbruck: Institut für Sprachwissenschaft der Universität Innsbruck.
- Yoshida, Kazuhiko (2021) Inferring linguistic change from a permanently closed historical corpus. In: Richard D. Janda, Brian D. Joseph, and Barbara S. Vance (eds.) *The handbook of historical linguistics, Volume II*, 196–213. Oxford: Wiley Blackwell.

執筆者連絡先：

京都産業大学外国語学部

e-mail: kyoshida[at]cc.kyoto-su.ac.jp

[受領日 2022年8月23日

最終原稿受理日 2023年1月16日]

## Abstract

**A New Phonological Feature Obtained from Hittite Cuneiform Clay Tablets:  
The Linguistic Contrast between Single and Double Affricates**

KAZUHIKO YOSHIDA

*Kyoto Sangyo University*

There is no positive evidence that Hittite scribes employed the signs including voiced and voiceless consonants in a contrastive manner to distinguish between voiced and voiceless values. What the Hittite scribes tried to show by orthography was a linguistic contrast between single and double consonants in intervocalic position. Single and double consonants indicate lenited and unlenited (or short and long) qualities, respectively. The Proto-Indo-European contrast of voiced/voiceless consonants, inherited also in Proto-Anatolian, was reinterpreted as one of lenited/unlenited (or short/long) in Hittite. This contrast is observed in stops, fricatives, laryngeals and sonorants. It is, however, traditionally assumed that the same contrast is not observed in affricates. We discuss this problem in this paper by analyzing the distribution of the 3 sg. present active endings, *-Vzzi* and *-Vzi*.

There are a small number of verbs which show the single *-z-* intervocalically in Old Hittite, as represented by *ú-e-mi-zi* (< \**au-ém-ǰe-di* < \**au-ém-ǰe-ti*) 'finds' and *arnuzi* (< \**h<sub>1</sub>r<sub>o</sub>-né-u-dí* < \**h<sub>1</sub>r<sub>o</sub>-né-u-tí*) '(re)moves'. The relevant verbs all go back to the Proto-Anatolian forms characterized by the ending with voiced \**d* created by lenition rules. An obvious inference to be drawn from this fact is that the single *-z-* in these verbs reflects the lenited quality produced from \**d* by affrication before \**i* in its prehistory. Although the lenited \**-dzi* was replaced by the corresponding unlenited \**-tsi* (< \**ti*) to a large extent, the Old Hittite verbs in *-z-* preserve a notably archaic feature speaking for the linguistic contrast between the lenited and unlenited affricates. This claim is supported by some further pieces of evidence.

In the case of the historical study of dead languages, written documents are virtually the only sources of linguistic information. Furthermore, written documents are recorded by means of letters, which are nothing more than tools for indirectly representing phonetic information. In spite of these inherent difficulties, the techniques of historical linguistics enable us to obtain evidence useful for inferring language change. In this paper we have discussed a case in which markedly improved philological analyses contribute to inferring linguistic changes that occurred in the internal history of the language as well as in its prehistory.